



小栗式ビジュアル・ラーニング・メソッド

ザ・英文法

イラストでわかる英語の仕組み

サンプル版

小栗 聡

iaxs vancouver
(アイアクセス・バンクーバー)

「えっ、ウソ、そうだったの」と目から鱗の英語の種あかし。

英語を難解にしている受験英語に宣戦布告！

心臓の弱い方はお医者さんにご相談を！

脳の固い方はご注意を！

頭の中で英語を描くという全く新しい学習メソッド

英語は、[簡単→わかる→楽しい] という学習サイクル

Copyright © 2013 by Satoshi Oguri. All rights reserved.

サンプル 1

名詞の基本用法 : There is some apple in the salad. はごく自然な英文 !

学校英語では、可算名詞と不可算名詞を説明するとき「普通」「物質」「抽象」「集合」「固有」名詞という仕分けをしますが、これだと私も含め多くの学習者は混乱し、実のところ何もわからないのが現状ではないでしょうか。なぜなら、具体的な普通名詞は数えられる、抽象的な抽象名詞と物質名詞は数えられないという説明では「apple は普通名詞だから数えられる」となり

Is there some apple in the salad?

という英文を見たときに当惑してしまいます。

また、「surprise は抽象名詞だから数えられません」となり、

I have a surprise for you.

という文を見るとやはり当惑してしまいます。

辞書をひと目見ればわかると思いますが、大多数の名詞が可算にも不可算にも使われます。ならば、可算名詞と不可算名詞の区別を学校や参考書で習った通りに考えるのではなく、もっと個々の名詞をイメージで捕らえるようにすれば、このような当惑もなくなるはずです。

名詞をイメージで捕らえるとはどういうことかと言うと「頭の中で名詞を具体的な形やイメージに描くことが出来れば数えられる名詞、描くことが出来なければ数えられない名詞」という至ってシンプルな判断基準です。

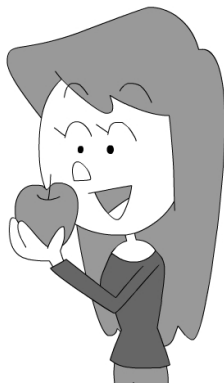
次の例文で実際にこのイメージをつかんでみましょう。例文中にある太字の名詞を頭の中で描いてみて下さい。どんなイメージ図になりますか？

- | | |
|---|------------------|
| a. I had an apple this morning. | (今朝りんごを食べました) |
| b. There is some apple in the salad. | (サラダにりんごが入っています) |

頭の中で具体的な形やイメージを描くことができましたか？

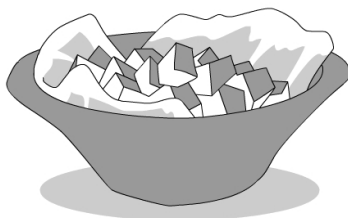
「頭の中で名詞を具体的な形やイメージに描くことが出来れば数えられる名詞、描くことが出来なければ数えられない名詞」という至ってシンプルな判断基準でしたよね。

a. 「球形をした果物のりんご」⇒ 頭の中で球形をした具体的なりんごの形を描けますね。



この球形の具体的なりんごの形が頭の中で描けたら
an apple になるのです。

b. 「サラダに入っているのは具体的なりんごの形を失った果肉のりんご」⇒ 頭の中で具体的な球形のりんごの形を描けませんね。



サラダの中に入っている小刻みにカットされたりんご
は具体的なりんごの形を失っていますよね。このように
具体的な球形のりんごの形が描けないりんごは some
apple になるのです。

サンプル2

現在完了形とは？

現在完了はおそらく多くの英語学習者が最も悩まされる英文法の1つでしょう。この原因は日本語を仲介させると、過去のことなのか現在のことなのかよくわからなくなるからです。

PEU(Swan) では、現在完了はほとんど一種の現在時制に等しく、現在完了の文を作る場合、同じ状況に対してふつう現在時制の文を作ることができるの説明しています。

例えば

I have lost my keys. (カギはありません)

学校英語で習った訳は「カギをなくした」と訳すと思いますが、例文の訳は「カギはありません」となっていますね。これは現在完了で一番重要なことが話題にしている事柄(動作)は過去のことしかし「話し手の意識は現在にある」という理由だからです。

話題にしている事柄(動作)は過去 ⇒ カギをなくしたという動作

話し手の意識は現在 ⇒ カギは今ないという意識

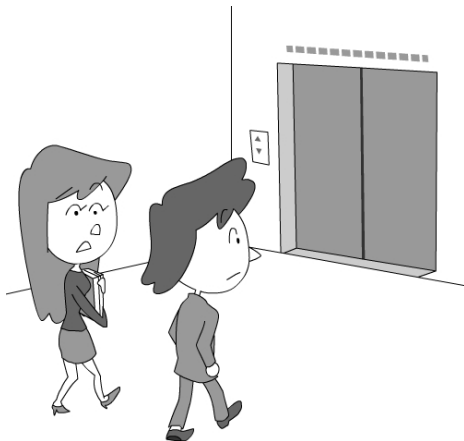
現在完了の文で一番伝えたい部分はこの現在の意識なのです。だから訳文は「カギはありません」となるのです。現在完了の文を理解するには、学校英語で習った訳には現れにくい本当の意味を理解することが重要です。

では過去と現在完了との違いを例文で比較してみましょう。

The elevator *broke down*. (but it's probably working again now.) [過去]
(エレベーターが故障した) [多分もう動いている]

The elevator *has broken down*. (We have to use the stairs.) [現在完了]
(エレベーターが故障している) [だから、階段を使わなければならない]

2文の違いを頭の中で描いてみましょう。例えば、出社時にオフィスビルに同僚と入って行く場面を想定してみましょう。オフィスは30階です。



例 1

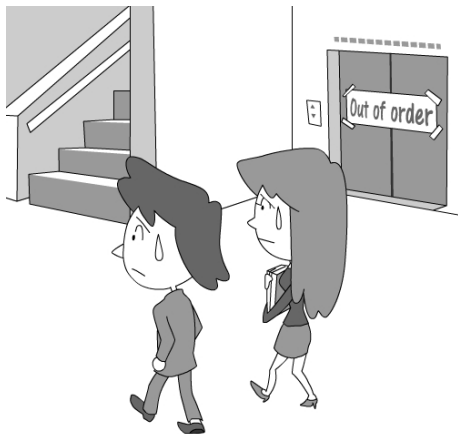
A: The elevator broke down last week.

B: I knew it would break down.

A: 先週エレベーターが故障したよ。

B: 故障すると思っていたわ。

さて、こんな会話しながら、二人はどこへ向かうでしょうか？そうですね、そのままエレベーターに向かいますね。故障した出来事は終わった事柄で、話し手の意識の中では「現在」という時点を含んでいないつまり、エレベーターはもう動いていると考えています。



例 2

A: The elevator has broken down.

B: You've got to be kidding!

A: エレベーターが故障してるよ。

B: うそでしょ！

さて、現在完了の文の会話では、二人がどこへ向かうかもうわかりますね。故障の結果として現在「エレベーターは使えないので階段を使わなければならない」という点に話し手の意識があるのです。だから泣き泣き二人は階段の方へ向かって歩いていくのです。

サンプル3

前置詞はイメージで！

「for」の基本イメージ と「to」の基本イメージがわかると、どうして動詞 buy は for を取り動詞 give は to を取るのかイメージでわかるようになります。

He bought some flowers for Karen. (1)

He gave some flowers to Karen. (2)

おそらく学校英語では、buy, book, find, make など for を用いる動詞のグループと give, offer, hand, send, show など to を用いる動詞のグループを理屈抜きに丸暗記させられたのではないのでしょうか。しかし、理屈抜きの丸暗記をしなくとも、前置詞の基本イメージと「XYZの三者関係」を理解すれば、どちらを用いるか容易にわかるようになります。

for → 「方向」のみを示し到達の意味を含まない。

to → 「方向」 + 「到達」の意味まで含む。

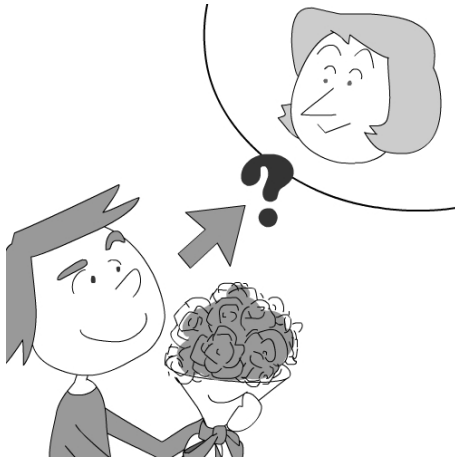
前置詞の主語(X)と目的語(Y)そしてそれをつなぐ前置詞 for と to の基本イメージを考えればいいのです。

これだけです！

1) He bought some flowers for → … Karen.

X

Y



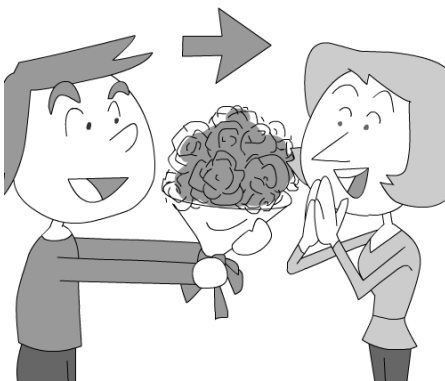
左イメージ図のように buy という動作の段階では some flowers はまだ Karen に到達しませんね。もちろん Karen にあげるために花を買っているのだから flowers の方向は Karen に向いています。でも、もしかしたら浮気者の彼は気が変わって Michelle に flowers をあげたかもしれませんよ。つまり buy という動作の結果ではまだ flowers は Karen に到達しないのです。

だから「方向のみ」の for が使われるのです。

2) He gave some flowers → to → Karen.

X

Y



左イメージのように gave という動作の結果 some flowers は Karen に到達します。もしあなたが誰かに花をあげるという行為をすれば、その花は相手に届きますよね。だから give という動作の結果、前置詞の主語 some flowers は目的語 Karen に到達するのです。

だから「方向+到達」の to が使われるのです。

サンプル4

法助動詞 could, would, might, should は過去形ではない！

学校英語で could「～できた」を can の過去形と習いませんでしたか？ その結果ずっと could や would, might が頭の中でなんとなく過去形のようなイメージになっていませんか？

確かに辞書を引けば might は may の過去、would は will の過去、could は can の過去と出てきますが、一部例外を除けば、この過去は時制の一致によるものです。

I think he may come. → I thought he might come.

She said, "I will do my best." → She said that she would do her best.

これは that-節(従属節)の中で時制の一致が行われるため「may → might」「will → would」になったものです。しかし、法助動詞 could, might, would, should は一般的には現在または未来のことについて述べるのです。

次の2文はどちらも現在時における推量です。

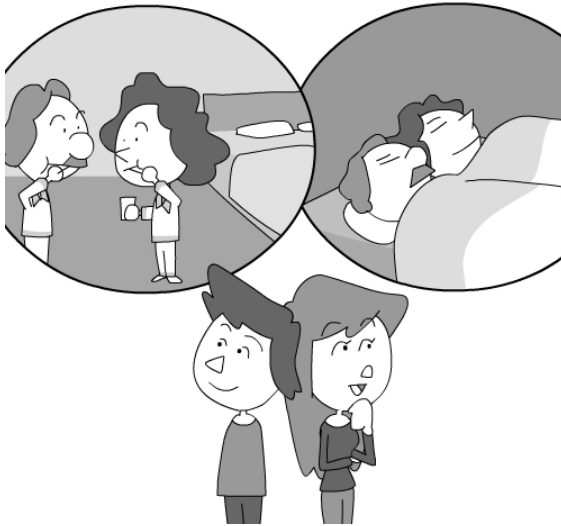
He might come. (彼は来るかもしれない)

She would do her best. (彼女はベストを尽くすでしょう)

一部例外を除けば、法助動詞には過去形というものは基本的に存在しません。しかし、法助動詞には過去の事柄を表わす用法があります。

この過去のことを表すために法助動詞(shallを除く)は完了不定詞「have + 過去分詞」と共に用いられます。

Will の例を紹介しましょう。



Don't call them now.

They will go to bed soon. [左]

(彼らはもうすぐ寝るから)

↓ 過去のこと

Don't call them now.

They will have gone to bed. [右]

(きっともう寝てしまっているから)

例えば次の will の例文を would にしても過去形にはなりません。

They will arrive soon. (彼らはもうすぐ着くよ)

They would arrive soon. (彼らはもうすぐ着くでしょう)

両者はどちらも未来の状況に対する話し手の「確信度」を表しています。しかし、確信の度合いが違います。

例文の日本語訳を見てみましょう。

will の訳は「着くよ」

would の訳は「着くでしょう」

となっています。

意外と多くの学習者が will の訳は「もうすぐ着くでしょう」とか「もうすぐ着くだろう」というようなイメージを持っているのではないのでしょうか。これは学校英語で will を「～だろう」「～でしょう」と教わったからです。しかし、勇気を持って言いますが、これは誤って伝えられてきたものです。

will を「～だろう」「～でしょう」と訳していると、いつまでたっても will を「ちょっと自信のない予測」のように感じてしまいます。しかし、PEU(Swan) では Will can express certainty or confidence about present or future situations. (will は現在や将来の状況に対する確信や自信を述べる) と説明しています。つまり will は自信がないどころか、相当自信のある確信度の高い予測なのです。

あえてもう1つ付け加えるならば、もし will が「～だろう」「～でしょう」という意味なら「～のはずだ」の should より will の方が確信度が強いという事実は不自然ですよね。
(ジーニアス英和引用：確信度 might < may < can < should < will < must の順に強くなる)

それに対して would の訳は「着くでしょう」となっています。もうおわかりだと思いますが学校英語で教わる「～だろう」とか「～でしょう」はむしろ would なのです。ジーニアス英和辞典を引いても would の訳は「～かもしれない」「～でしょう」となっていますよ。

would はもともと仮定法から発生したもの。つまり、if 節の内容を言外に含んでいるので確信度が低くなり will と比べるとやや自信のなさが現れるのです。

前述の例文、

They would arrive soon. (彼らはもうすぐ着くでしょう)

も if 節を言外に含んでいると考えてみましょう。例えば一例として、

They would arrive soon (if they caught the first train).

(もし始発電車に乗っていれば) 彼らはもうすぐ着くでしょう

実際に始発電車に乗っているかどうか分からない。だから would は will よりも確信度の低い予測になるのです。

サンプル5

that は who / which の代用ではない！

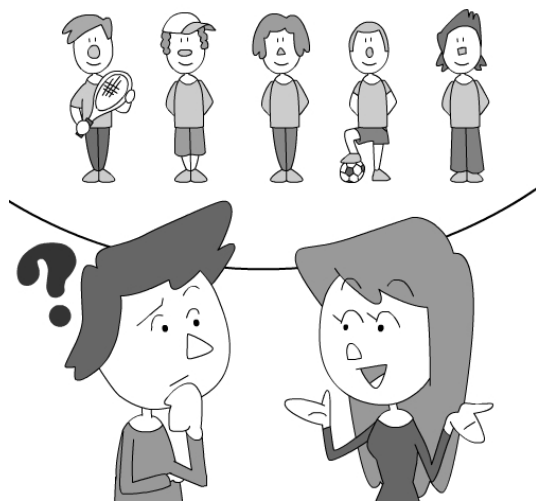
学校英語や参考書などでは関係代名詞 that を who/which の代りに使うことができ、両者の間にはあまり意味的違いがないような説明をしているものもたくさんありますが CGEL(Huddleston and Pullum)では両者は異なる関係代名詞であると述べています。

つまり、関係代名詞 who / which と that では働き(意味)が違うということです。

では、両者の違いを見てみましょう。

who, which はもともと疑問詞です。この who「だれ」which「どれ」という基本イメージが関係詞 who, which の基本イメージだと考えてみて下さい。

The boy who is wearing a baseball cap is my son.



The boy...と聞いたとき聞き手は「だれ？」と思いますよね。左のイメージ図のように、いきなり「その男の子」と言われても、男の子が何人もいるから、聞き手には「どの子」を指しているのかわかりませんよね。

だから、話し手は The boy who...を使って「男の子だれかと言うと…」のように「男の子」を関係詞が指示語として受け、誰を示すのかを埋めていくような働きをします。

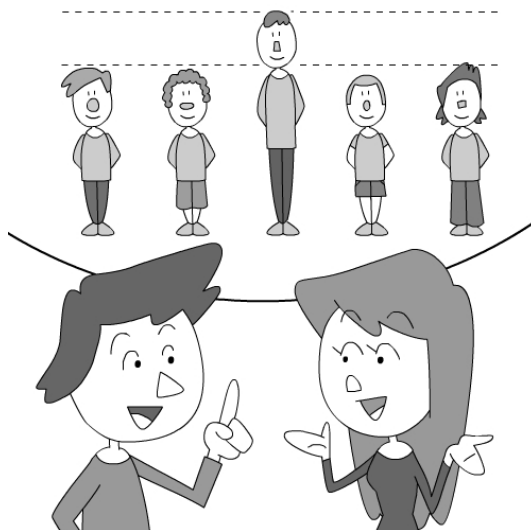
実際「男の子、だれかと言うと、ほら野球帽をかぶっている男の子」と言われれば、どの男の子のことを指しているか聞き手のあなたはわかりますね。男の子は何人もいますが、ここでは野球帽をかぶっている男の子を指すわけです。

例文を学校英語で習ったように訳すと「野球帽をかぶっている男の子が私の息子です」となり日本語には関係代名詞 *who* が訳の中に現れません。関係代名詞 *who* を理解するためにも日本語訳を「男の子、だれかと言うと…」のように前から訳していくと関係代名詞の本質がよりよくわかりますよ。

これに対して *that* 関係詞の *that* はもともと「それ」「あれ」という指示代名詞です。だから「その〜」「あの〜」と実際に指し示すことができる「人・もの」に使うのです。

He is the tallest boy *that* I've ever had in my class.

(彼は私が受け持った中で最も背の高い男の子です)



イメージ図のように the tallest boy... と聞いたとき聞き手はその男の子が具体的にわかるはずです。一番背の高い男の子とわれれば、一目でわかりますね。だから *who*... を使って「どの子かと言うと…」のように「男の子」を特定する必要がないのです。つまり具体的にわかっている男の子を指して、the tallest boy *that*...「その〜」「あの〜」と続けていく働きをするのです。

「彼は最も背の高い男の子、(あの子)私が受け持った中でね」と言われれば、どの男の子のことを指しているか聞き手のあなたはわかりますね。男の子は何人もいますが、ここでは一番背の高い男の子を指すわけです。この理由から先行詞に最上級, all, no, every, first, only, same などが付くと具体的に「誰」「何」を指しているのかははっきりするため、その対象(先行詞)を指して *that* と言うことが多くなるのです。

サンプル 6

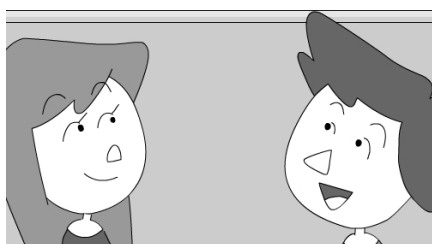
関係代名詞と分詞の相違点

次の2文を訳してみてください。どちらも「向こうで走っている男性が見えますか？」というような訳になりませんか？関係詞節のユニットでも説明しましたが、学校英語では関係代名詞を正しく訳していないので関係代名詞と分詞の訳の違いがわからないのです。しかし両者は全く異なる文です。だから、両者の違いをイメージで理解しましょう。

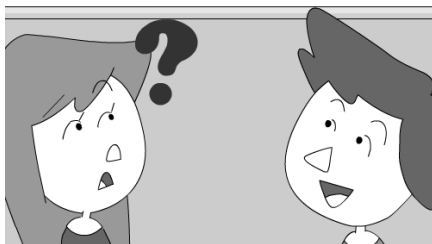
- 1) Can you see the man *running* over there?
- 2) Can you see the man *who is running* over there?



1) の分詞文は左イメージ図のように、走っている男性を指している。つまり、走っている男性しかいないので関係代名詞でわざわざ相手に「誰」と限定する必要がない場面。



それに対して 2) の関係代名詞節の文では、左イメージ図のように、走っている男性以外にも男性が何人かいるので「走っている男性」と限定しないと相手がどの男性のことかわからないような場面。



このように同じように和訳される両者ですが、使われる場面が全く異なることがわかりますね。